

ニュージーランドにおける コミュニティラーニングセンターの形成過程

—フィールドデングの事例を中心にして—

神 田 嘉 延

(1999年10月15日 提出)

The Formation Process of Community Learning Centre in New Zealand :
Mainly on The FEILDING Community Centre

Yoshinobu KANDA

目 次

はじめに

第1章 コミュニティセンターの創設過程と農業高校

- (1) コミュニティセンターの創設者たちの国際的視野
- (2) 地方の農業高校とコミュニティ
- (3) コミュニティセンターのスタッフの待遇と施設の状況
- (4) 学校とコミュニティセンターの違い

第2章 創設当時のコミュニティセンターの学習活動

- (1) 国際的フォーラムと地域での暮らしの学習
—広島原爆問題の学習から—
- (2) 子どものためのプレーセンターと親の学習
- (3) 1944年のフィールドデングのコミュニティセンターの具体的活動内容

第3章 コミュニティラーニングセンターの継承発展

- (1) 戦後のコミュニティラーニングセンターの管理運営の危機と継承
- (2) 1990年代のコミュニティラーニングセンター

まとめ

はじめに

本論では、ニュージーランドにおけるコミュニティラーニングセンターの形成過程をフィールドデングの事例をとおして分析するものである。ニュージーランドでは、1930年代から40年代にかけて、地域の生活により深く密着したコミュニティラーニングセンターが生まれていくのであった。

この先駆的活動のひとつとして、フィールデングのコミュニティラーニングセンターがあったのである。フィールデングのラーニングセンターのディレクターをつとめたサマーセット氏は、ニュージーランドのコミュニティラーニングセンターの活動に大きな影響を与えていくのである。

ニュージーランドのコミュニティラーニングセンターは、地域の成人の学習施設であったが、日本の公民館の形成と異なるのは、教育行政の主導によって、政策的につくられていったのではなく、1930年代の農業高校の地域との連携活動、地域民主主義の形成ということから、学校と地域住民によってコミュニティラーニングセンターがつくられていくという特徴をもっている。

コミュニティラーニングセンターの管理運営は、施設が出来た当初から地域の学習者による評議会方式で行われていたのである。学習内容も民主主義や生活権の内容が大きな位置を占め、戦後まもない1947年には、広島原爆問題を素材にした反核の平和学習が積極的にフォーラム形式で行われていたのである。

中等教育が地域住民との関係で、より密接になっていくのは、地域民主主義形成での学校の役割と農業等の職業技術教育を重視した地域性が大きな理由になっている。地域の成人教育のセンターとして、中等教育学校が役割を果たしていくのも職業技術教育を重視した地域性とさらに、地域民主主義形成を大切にしたということから、歴史的必然性をもっている。

1930年代は、大恐慌というなかでの世界史的な背景のなかで、コミュニティラーニングセンターがニュージーランドで形成されていったことを直視する必要がある。そして、コミュニティラーニングセンターが生まれていく経過において、イギリスのケンブリッジのビレッジカレッジ、デンマークの国民高等学校、アメリカのウイスコンシンのコミュニティエデケーションなど国際的な地域成人教育施設の実践経験を学んでいるのである。

日本において、支配的には、国家による社会統治政策的な社会教育行政の形成であった。日本は、ファシズムへの移行、戦時国家体制のなかで、国民総動員体制の動員型の参加ということから地域の社会教育行政が整備されていったのである。

1930年代の世界大恐慌後の世界の国家独占的行財政施策という歴史的背景のなかで、日本は、ファシズム体制に突入していくが、地域成人教育の整備において、国際的視点からみるならば、民主主義とファシズムという対抗が国際的にあったことを見落としてはならない。

ニュージーランドのコミュニティラーニングセンターの成人教育は、1930年代の世界史的背景のなかで、地域民主主義の発展という意味をもっていたのである。本論は、日本の公民教育の館形成との比較成人教育の問題意識からニュージーランドのコミュニティラーニングセンターの事例を分析するものである。しかし、日本の分析は、本論の対象ではない。

本論で分析対象にしたフィールデングのコミュニティラーニングセンターは、図1にみられるように、ニュージーランドの北島の首都ウエリントン市から北部の学術都市パーマストン市の隣の町である。ニュージーランドの1948年頃の成人教育の地方は17の区域に分かれていたのである。

区域によっては、成人教育委員会があり、また、地域の成人教育のセンターがあったのである。

また区域には、複数の成人教育委員会や地域成人教育センターを有しており、機会的に区域に応じた成人教育の機関、施設があったのではなく、地域住民自身の学習運動によって組織されていったのである。

大学を有する都市は、6つの地域で、大学は全国に7つあった。労働者教育協会の組織があった都市は、オークランド、ウエリントン、クライストチャーチ、ダニーデンである。これらの都市は大学があったところである¹⁾。

労働者教育協会のあった都市では、大学との関係で成人教育が積極的に行われたのである。1938年の教育の改正法で大学が成人教育の場として公的に認められたのである。さらに、改正法では、国民的なレベルと地方レベルで成人教育の評議会を設置して、成人教育の制度を整備しはじめたのである。この1938年はニュージーランドの社会保障制度が制定され、高福祉の総合的な社会福祉、完全雇用が充実していく時期でもあった。

1935年に、はじめてニュージーランドで発足した労働党政権は、その後国民党との2大政党のもとに、戦後の1949年までの政権によって、高度な福祉国家の体制をつくりあげていったのである。成人教育も、この高度な福祉国家体制のなかで充実していったのである。高度な福祉国家の整備充実と成人教育の発達によって、ニュージーランド国民に、相互扶助性、公平・平等、総合性の人権と民主主義的意識が国民のなかに、定着していくのであった。

ところで、ニュージーランドで先導的にコミュニティーラーニングセンターがつくられたフィールデングの町は、パーマストンノース市というマッセイ大学を中心にした農業関連の研究機関が集中する学術都市の隣の町であった。このことから、先進的な農民が、農業に関する学習を積極的に大学の講義や実習などを受けやすいという条件をもっていた地域である。

1938年からフィールデングの地域成人教育センターの活動がはじまっているが、当時のニュージーランドの成人教育の行政は、教育省の指導のもとにおかれていた。しかし、地理的に異なる領域の管轄という多様性をもっていた。当時のニュージーランドの成人教育は、地方自治体、地方の教育委員会、小中等学校の地域委員会、職業高等学校委員会などによって実施されていたのである。

成人教育は、地域の経済発展、地域の生活や文化の向上の必要によって行われていたため、きわめて強い地域性をもっていたのである。また、成人教育を進めていくうえで、ボランティア組織が大きな役割を果たしたのも特徴である。教育省や地方自治体が財政的な援助をしていることも成人教育の発展にとって大切なことであった。

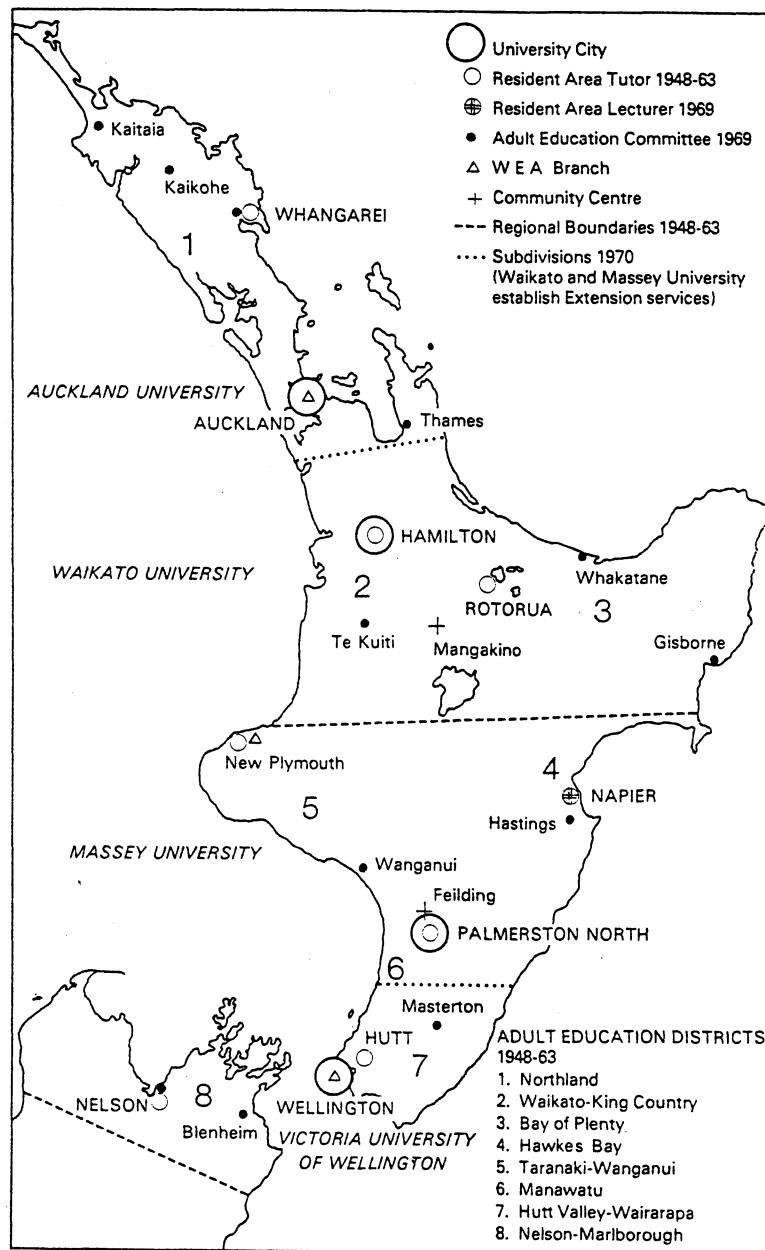
ニュージーランドの成人教育に関するフレームワークや政策を国民的なレベルでつくっていくために、成人教育評議会を国レベルでつくっていた。この評議会は、12名の構成からなっていたが、地方の代表から8名、学校教育、図書館、放送、大学からと、それぞれの成人教育に深く関わっていた分野の機関の責任者が参加していたのである。

成人教育の全国的な評議会は、地方や地域レベルのアドバイザーや地方の成人教育の発展のために意見を提示することなどを行うと同時に、ニュージーランドの成人教育の発展のために、地方が

らのレポートを特別に受けている。また、地域のコミュニティセンターのフルタイムのチューターや管理人のための地位や条件、最低賃金の基準などを示していた。

そして、国内や世界の成人教育の情報収集をし、成人教育施設のディレクターの会議、地方代表の会議、チューターの会議などを組織している。地方の成人教育の公的な機関と協力してチューターの養成もしていたのである。

行政的な事務は教育省と健康、農業などの省との連携が行われていた。このように成人教育を全



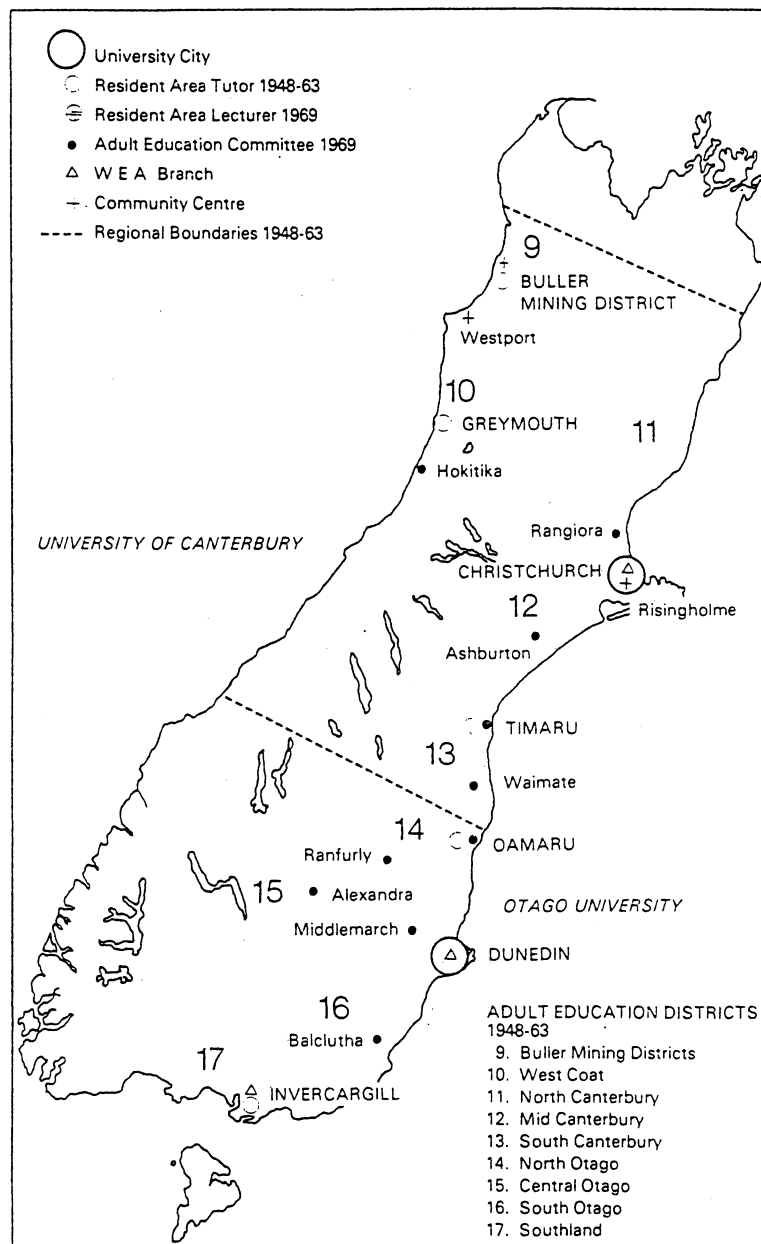
図(1) ニュージーランド北島の教育地方区成人教育施設 (1948年)

Structures and Attitudes in Newzealand Adult Education, 1945-75
Newzealand Council for Educational Research より

国的に推進していくうえで、国家の支援によって推奨されている成人教育評議会は大きな役割をしているのである。地方レベルの成人教育の組織は、教育を委せられている組織的機能と教育の構造や方法を考えていく側面と2つの組織的機能があった。

地方住民の学習要求に責任をもつためには、全国成人教育評議会とリンクして、より強力なアドバイザーが必要であった。それぞれの地方の現存している学習要求にたいして、サービスを提供するだけでなく、あたらしい要求や満足を充足するための探求が求められていたのである。

ボランティア組織は重要であるが、地域住民の要求を満たすためのボランティア組織がないところ



図(2) ニュージーランドの南島の教育地方区成人教育施設 (1948年)

Structures and Attitudes in Newzealand Adult Education, 1945-75
 Newzealand Council for Educational Research より

もある。既存の組織による学習の組織ばかりでなく、あらたに組織化されていない住民の学習が必要であった。つまり、学習要求を顕在化させていない地域住民の成人教育も大切にしたのである。

この意味で地方の成人教育評議会を設けて、地域住民の学習要求の顕在化とその組織化に制度的にとりくむための整備をしたのであった。また、地方成人教育評議会は、地方の成人教育活動をコーディネーターすること、チューターを養成し、チューターと連絡することを仕事としている。

地方成人教育評議会のメンバーには、大学、学校委員会、地方の教育委員会のなかにある学校の視学、技術高等学校、コミュニティラーニングセンターの代表、ボランティア組織などの代表などによって構成されていたのである。

労働者教育協会のあるところでは、この委員の選出に大きな影響力をもったのである。地域の成人教育の推進ではコミュニティラーニングセンターが大きな位置を占めていた。コミュニティラーニングセンターのないところでは、チューターを成人教育評議会のもとに準備した。農村の学校の教師は、チューターとしての役割を果たしたのである。

成人教育の推進のための国家財政が積極的に支出され、地方の成人教育評議会単位にフルタイムのディレクターや事務上のスタッフ、チューターが配置されたのである。コミュニティセンターにもフィールドングを典型的事例として、ディレクターが配属されていくのである⁽²⁾。

以上のように1938年の教育改正法によって、国の成人教育制度が動きはじめていくのである。フィールドングのコミュニティラーニングセンターがつくられていく経過で、世界大恐慌というなかで、1935年の労働政権の誕生という時代的背景をみておく必要がある。

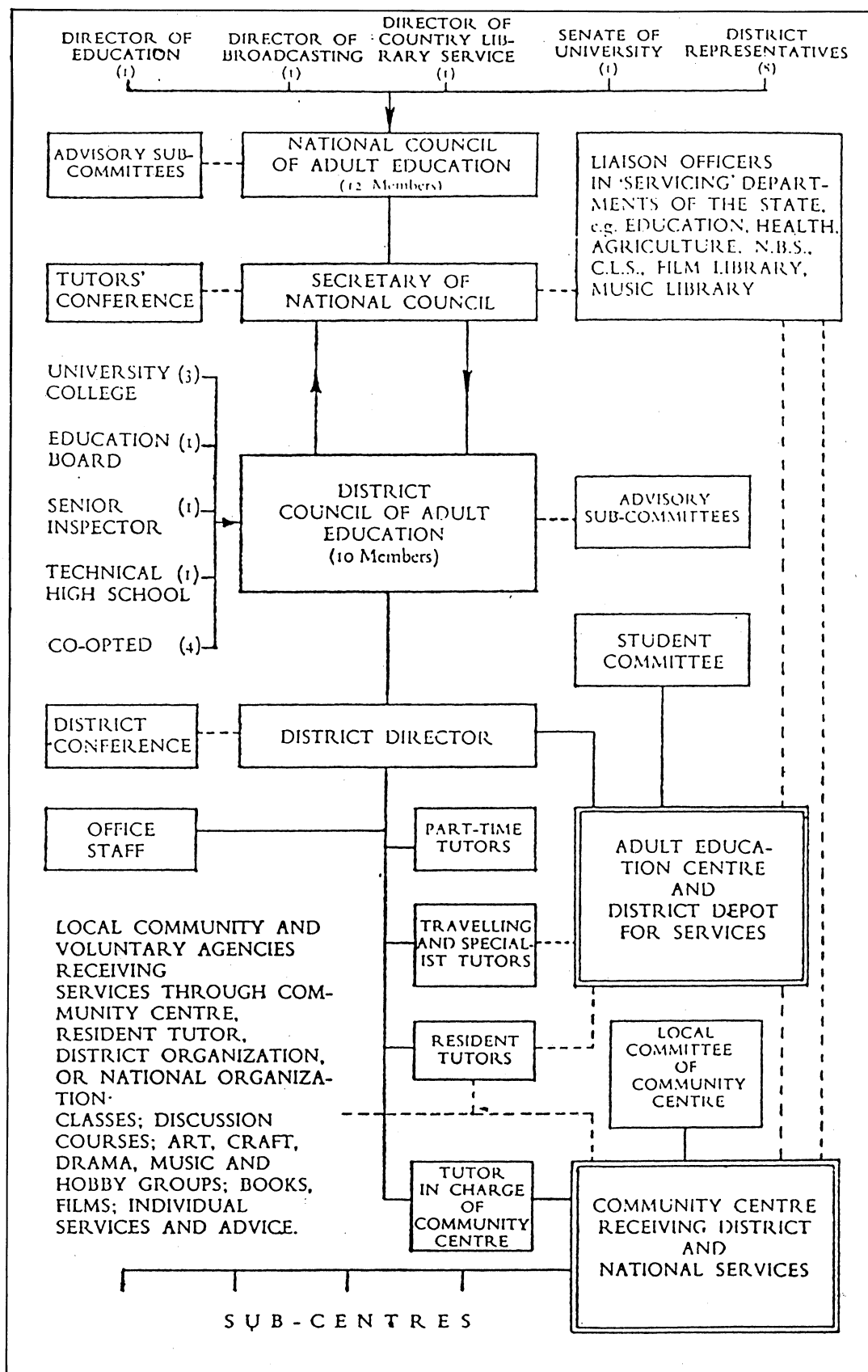


図 (3) Adult Education in New Zealand

Structures and Attitudes in Newzealand Adult Education, 1945-75
Newzealand Council for Educational Researchより

第1章 コミュニティセンターの創設過程と農業高校

(1) コミュニティセンターの創設者たちの国際的視野

フィールデングのコミュニティラーニングセンターは、ニュージーランドの地域での生産や生活との関連で、成人教育を推進していった典型的な事例である。このセンターは、フィールデング農業高校の校長ワイルド氏が地域住民の学習権を保障していくために、リーダーシップをとって出発したものである。具体的な実践の企画、運営、組織化は、1938年から10年にわたってサマーセット夫妻によって行われ、サマーセット夫妻の業績によって、コミュニティセンターの歴史的基盤がつけられたものである。

フィールデングのコミュニティラーニングセンターは、ニュージーランドでも古くからある地域学習センターである。このコミュニティラーニングセンターは、フィールデング農業高校による成人教育として構想されたものである。

このセンターは、農業高校内施設ではなく、街の中心に学習施設をつくり、フィールデングの街と、広大な農村地域を結びつけるために企画されたという特徴をもっていた。それは、遠隔地の成人教育のためのセンターとしての意味のなかに、街の住民と農民を統一していこうという考えの発想があったためである。

フィールデング農業高校の校長ワイルド氏は、1922年にフィールデング農業高校に赴任している。かれは、コミュニティに、新しい方法と見方を準備した。ワイルド氏は、地質学と化学の専門資格をリンカーン農業大学で取得し、クライストチャーチの教員養成学校で中等教員の資格をとっている。

サマーセット夫妻とワイルド氏は、カーネギ財団の援助で、世界の教育視察の経験をもったのである。かれらは、イギリス、デンマークなどのヨーロッパやアメリカ合衆国に訪問し、地域教育運動のリーダーとコンタクトをとったのである。サマーセット夫妻は、1936年、ワイルド氏は1937年に世界の農村の地域教育運動の状況を視察している。ワイルド氏が帰国した1938年に、フィールデングのコミュニティセンターの活動が出発している³⁾。

イギリスのケンブリッジのブレッジカレッジは、フィールデングのコミュニティセンターをつくっていくうえで参考にされている。創始者たちは、イギリスのケンブリッジのブレッジカレッジに滞在して、ニュージーランドの地域成人教育施設の構想をした。

そこで、農村教育の発展のためのブレッジ・カレッジの思想的基盤になったヘンリー・モリスの農村教育の全局面の変革、すべての人々の日常生活のなかに存在するコミュニティセンターによって、農村住民に学習機会を与えるということを学ぶのである。

そして、サマーセット氏は、スワストンやポッティサムスのブレッジカレッジを訪れ、長期にわたって、実際のブレッジカレッジを経営する責任者とも議論をしている。ブレッジカレッジの経営責任者たちは、デンマークの成人教育のための民衆高等学校に、関心を示していたのである。イギリ

スのケンブリッジのビレッジカレッジの経営者は、他の国の先進的な農村成人教育の実践に関心を示して、サマーセット氏との間でも大きな議論のテーマになったのである。

ビレッジカレッジは、協同での保育園、小学校、中学校を農村のグループの必要のために計画された。それは、成人の学習やレクリエーション、農村図書館の役割を果たした。ビレッジカレッジの施設は、農村のコミュニティと学校によって共有されていたのである。

これらの成人教育施設が、学校とコミュニティによって、つくられていることに多くの興味をひかれたのである。そして、アメリカ合衆国では、ウイスコンシン大学によって、実験的におこなわれている学校と農村コミュニティの状況をみている。

そして、エドモンド・ブラナーやジョン・コルボなどの農村社会学者や教育学者と議論をしてきているのである。ジョン・コルボは、1938年のフィールデングのコミュニティセンターの設立の年にサマーセット氏の実践をみにきている。かれは、農村のコミュニティの生活調査の専門家であり、ニュージーランドでも、その年にニュージーランドの酪農民の生活調査を実施している。

サマーセット婦人は、1年間の海外視察のとき、夫とともに多くの教育施設を観察するばかりではなかった。彼女の農村の保育園の訪問は、最高の機会を与えた。幼児教育のために専門家を配置しての相談活動をしている姿は、大きな共鳴を受けたのである。

ニュージーランドのカンタベリー地方オックスフォードの実践とともに、教育視察の1年間の世界旅は、サマーセット夫妻に、その後の実践に影響を大きく与えていくのである。サマーセット婦人のフィールデングのコミュニティセンターのプレイセンターの創設に、ケンブリッジのビレッジカレッジの幼児教育の実践の視察経験が影響を与えたのである⁽⁴⁾。

サマーセット婦人は、イギリスで農村の保育園を訪問したが、さらに、ロンドンで、ドクターズザン・イサクスによって開かれていたセミナーに参加している。ニューヨークでは、ダルトンスクールをみて、イギリスでの経験と同じように学んでいる。

サマーセット婦人は、海外視察として、幼児教育のための団体組織をとおして、親の教育をする必要性を痛感したのである。以前にカンタベリー地方で実践したことと異なって、1938年からフィールデングではじめた成人教育はあたらしいアプローチであった⁽⁵⁾。

当時、コミュニティセンターは、ニュージーランドではあたらしい概念であったのである。サマーセット夫妻は、フィールデングのコミュニティセンターの新しい創造のために、赴任と同時に、自己の海外視察の体験をとりいれていくのである。そして、海外の地域成人教育の実状を知るために、イギリス、デンマーク、スエーデン、ドイツ、アメリカなどと積極的に継続的に、コンタクトをとっていくのである。

1920年代から30年代のイギリスのコミュニティセンターの運動に、強い関心を示したサマーセット氏であった。しかし、イギリスでは農村地域のビレッジホールを基盤にして、社会的サービス活動としてのボランティアなどのグループ活動が地域で展開されていた。その方法で、農村のコミュニティセンターが発達していくのであった。

フィールデングのコミュニティセンターは、遠隔地教育として、学校や大学のできない特別の成人教育をめざしたのである。コミュニティセンターは成人の生活や仕事の学習のための機関として構想されたのである。

サマーセット氏や、ワイルド氏が構想したフィールデングのコミュニティセンターの構想では、農業高校による地域成人教育活動としてのコミュニティセンターであったのである。したがって、センターは、成人教育の独自の役割があったが、農業高校の生徒たちの実際の生活との関係で、教育プログラムに大きく貢献していくのである。

ニュージーランドのフィールデングのコミュニティセンターは、農業高校の教育活動と連携しての成人教育活動の側面もあった。イギリスのケンブリッジのビレッジカレッジという農村の学校での成人教育活動は、大きな参考になったが、独自にニュージーランドの状況に即して、構想されたものである。ケンブリッジは、ビレッジカレッジという農村学校で、農村での遠隔地の成人教育のためのコミュニティセンターではなかったのである。ニュージーランドでは、独自に学校と離れてコミュニティラーニングセンターの成人教育施設をつくり、成人教育のための専門的なディレクターを配属したことも特徴的である。

サマーセット氏は、イギリスの情報ばかりでなく、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、アメリカなどの世界の情報を積極的に集めて、ニュージーランドの農村の現状に即して、コミュニティセンターの活動を展開していくのである。

ここに、国際的な視野をもっていたサマーセット氏の意欲があらわれていたのである。また、農村における民主主義形成のための成人教育活動を進めていくうえで、世界の様々な事件について、議論していくフォーラムの学習形態をもった。このことは、フィールデングのコミュニティセンターの大きな特徴であった。

ワイルド氏は、イギリス式の古い学校教育カリキュラムは、新しい国ではあわなかったと考える。新しい国での富は、土壌改良にとくに、依存していると。あたらしい土地は、すぐに地力が衰える。

土の表面には、化学的、物理的問題がある。動物の管理、牧草の経営、農場の経済を探究することが必要であった。地域の経済発展に土づくりが大切ということから、それとの関係で大いに役にたつ科学的方法の習得を重視したのであった。これらのすべては、あたらしい農業教育のための論点であった。このように、ニュージーランドの地域の状況に即して、コミュニティラーニングセンターを既存の様々な制度を工夫しながらつくったことが、創始者の大きな独創性である。

(2) 地方の農業高校とコミュニティ

農業高校においても生徒の自治活動を重視した校長ワイルド氏であったので、サマーセット氏と、協同してのコミュニティセンターの成人教育活動も、学習者の自治を大切にしての運営をしたのであった。コミュニティセンターの利用者を中心にしての運営評議会をつくったのである。学校経営での生徒の自治活動を重視する内在的な発展が、地域の成人教育の学校の役割として、コミュニテ

ィラーニングセンターをつくっていったのである。

地方の農業高校は、2つの目的をもっていた。第1は、初等教育後の一般教養のために必要とするための準備である。第2は、農民として、実践的な側面からの専門的なコースを発達させることが必要であるとワイルド氏は考えていた。

中等教育としての農業高校は、科学的な専門性を発達させるための職業技術教育の側面と初等教育後の一般教養を豊かにしていく側面と2つの側面をもっていたのである。とくに、後者では、農村における地域民主主義の形成との関係をワイルド氏は大切にしたのである。農業の科学的・専門的な職業技術教育と民主主義形成ということから地域との関係を大切にしていける学校経営の方式をとったのである。

フィールデングには、公立と私立のカソリック系の2つの小学校があった。農業高校は、小学校教育後の青年教育の意味をもっていたのである。この意味で、地域の民主主義を形成していく社会人としての一般教養を高めることを大切にしたのである。

農業高校は、酪農や複合農業などのサイドが強よかった。多くの農家の息子がひきつけられていた。学校は、自治のしくみをもっていた。農業高校は、一般教養、商業、芸術、クラフトの夜間授業をもった。学校は、世界の事件のこと、ニュージーランドの社会問題、親のための子どもの研究グループなどをもっていなかった。コミュニティーセンターに、それらが期待されたのである。

フィールデングの農業高校は、地方の中等教育と技術夜間学校との面をもっていた。学校が開設されたときの生徒は、119人で、男子67人、女子52人であった。この内訳は、初等教育学校から74人、旧地域の高等学校から38人、他の中等教育学校から7人が移籍してきたのである。

74人の初等教育学校の入学者は、大学入学許可の試験へのためのアカデミックコース、女子14人、男子22人、農業コース男子18人、家庭科学コース、商業コースの女子20人であった。職業高校の性格が強いということは、高等学校が最終学歴の希望ということではなく、大学進学への希望をもっている生徒が多いのである。

2年目の生徒は、男子20名、女子10名であった。3年目は、男子8名、女子6名であった。4年目は大学入学許可の試験の合格をめざす1名の男子生徒である。それぞれ、異なる科目を履修する生徒たちによって学校の生徒の構成がなっていたのである。

コースの設定は、異なる特別の科目のためにクラスを移動するためのものである。学校開設当時の生徒指導にあたったのは、校長と若い4人の教師である。男子生徒のコースと女子生徒のコースがあったが、1938年には、300人の生徒と14人のスタッフになっていく。

フィールデングでは、学校での応用として民主主義の原理の発見を実施していたのである。それは、ワイルド氏自身が注意深く指導方法を考へての学校における自治活動の展開であった。フィールデングの農業高校では、自治活動が育っていき、学校の伝統となっていたのである。

学校では民主主義の形成者としての教育を重視することから、自治の原理を教える方法をとりにれた。また、民主主義の形成者として、科学的方法の効果を大切にしたい。学校では会議の参加の形

態を重視し、公平な委員会のメンバーの選挙を行わせた。学校の生活は、自己中心を克服するばかりでなく、コミュニティの責任ある立場を身につけていくことができるとしている。

ところで、ワイルド氏は、自分自身の権利ばかりでなく、仲間の権利を考えるように、適切な人間関係のコミュニティを尊重する方法をとった。生徒による学校自治のとりくみは、それぞれの学年ごとに、議長と委員を選ばせて、学年会議を設定した。

スポーツ活動では生徒の自治活動が有効に発揮されたのである。そして、それぞれの生徒の学校内の権利が公平に保障されるように、また、スポーツ活動などの生徒の課外活動などの機会が公平に保障されるように、学校内に公平委員会を設置しているのである⁶⁾。

さらに、ワイルド氏は、地域の民主主義にとって、街と農村の統一を考えていた。学校をとおして、民主主義的に自分たち自身で地域を治める教養ということで、責任ある市民教養の教育を実施していた。とくに、農村と街の異なる環境の地域生活を、教育をとおして、実践的に一致させようとしたのである。

農業高校の生徒達が地域民主主義形成の能力を身につけていくために、また同時に広い視野を身につけるために、具体的に地域での成人教育と学校教育が結んでいくことが必要であった。この農業高校の校長ワイルド氏の要請に応じて、サマーセット夫妻は、地域教育活動の推進のため、フィールデングに招かれたのである。

サマーセット氏は、南島のカンタベリー地方で、子どもの家や労働者教育協会の実践をしていた。つまり、サマーセット夫妻は、当時、労働者教育活動、地域教育活動でニュージーランドでも知られていた人であった。

ワイルド氏は、コミュニティセンターが設立した同じ年に、新しい農業高校の学校経営の構想として、科学的な農法による豊かな農業の発達と、生徒たちが生きていくための自治活動を中心とした教育方針を、積極的にうちたてていたのである。

農業高校の生徒の教育にとって、地域の暮らしと結びついた成人教育活動は、就学前の子どものプレイセンターの援助活動に生徒を参加させるなどの事例に積極的にみられる。学校の自治的な活動は、農業高校が地域成人教育を担っていたことから、地域住民の成人教育活動の自治的活動へと発展していくのであった。このことが、独自に地域でのコミュニティラーニングセンターをつくっていく力にもなったのである。

(3) コミュニティセンターのスタッフの待遇と施設の状況

サマーセット氏は、フィールデングのコミュニティセンターのディレクターとして招かれたが、夫妻は形式的に農業高校のスタッフとして任命されたのである。これは、コミュニティセンターのディレクターを公教育のなかで位置づけるために、ワイルド氏が工夫した方策であった。成人教育のスタッフを配属する制度がなかったため、そのような工夫が行われたのである。

コミュニティセンターに専門的な教育職のスタッフをフルタイムに位置づけして、配置したこと

は、ニュージーランドの成人教育を発展させていくことで大きな前進であった。コミュニティセンターは、すでに20年前に、ニュージーランドでもランギオラやオックスフォードで始められていた。そこでは、恒常的に地域の成人教育を企画指導していく専門的なスタッフの配属はなく、パートタイムの講師や巡回講師によって地域の成人教育が担われている。そして、フィールデンングでは、コミュニティセンターとして、学習を企画、組織していく事務所が独自につくられ、学習のための建物施設と機器が整備されたのである。

フィールデンングのコミュニティセンターが作られる前では、地域のなかで組織的に継続して、専門的に学習を企画し、組織化する機関はなかった。多くのコミュニティセンターでの学習は、地域の集会所で、労働者教育協会などの組織された成人がパートタイムの講師を招くということで、そこに暮らしている人々の様々な生活文化要求から学習を多様に組織していくということで、地域の成人教育の専門スタッフの配置ではなかったのである。

フィールデンングのコミュニティセンターは、近くの地域住民の学習の組織化ばかりでなく、農業高校の行う成人のための遠隔地への教育をも含んでいたもので、広い地域での成人の学習を組織していったのである。

とくに、子どものための学習活動は、サマーセット婦人の自動車による活動にみるように、その典型としてみることができる。ニュージーランドでの学校としての成人教育は、フィールデンング以外に数多くみることができる。学校内に成人教育のためのセクションを設けて、学校内の活動として成人教育活動が実施されているのである。

フィールデンング農業高校の特徴は、制度の学校としての遠隔地教育を利用しているが、学校の経営のなかに組み入れられて、学校の組織活動の一環として成人教育を実施したのではない。

コミュニティセンターの学習施設を独自に設けている。つまり、学校とは分離しての地域の独自の学習施設なのである。ここにもフィールデンングのコミュニティセンターが成人の学習施設としての意味をもって、ラーニングセンターと呼ばれるようになっていくのである。この動きは、ニュージーランドの成人教育の発達のかなでの先見性ということになるのである。

ところで、コミュニティセンターの学習は、子どものこと、政治経済教養、社会的一般教養、文化芸術の学習、文化グループの活動ということばかりでなく、ときには、農業地域の特殊性を生かして、短期に集中しての養蜂、園芸や天文学の基礎なども取り入れた学習を展開している。それは、地域性を重視した結果の学習内容でもある。

教育省の成人教育の諮問委員会が1947年にだされた「ニュージーランドの成人教育の未来」では、今までの成人教育の実践を総括している。そこにおいて、フィールデンングのコミュニティセンターは、ニュージーランドの地域成人教育にとって、専任スタッフを配属したことの画期性を高く評価されている⁽⁷⁾。

サマーセット夫妻は、農業高校の専門的スタッフの待遇で、コミュニティセンターの経営にあたるのである。サマーセット氏は、クライストチャーチの教育大学の修士課程を卒業し、14年間カン

タベリー地方のオックスフォードで教育活動をしていた。とくに、労働者教育活動に熱心に参加していたのである。

しかし、かれは、身体的なハンデキャップをもっていたことから、正式な教員資格を得ることができなかつたのである。1948年にビクトリア大学のスタッフになるまで、かれの教員としての地位は臨時的な待遇であった。

サマーセット婦人は、正規の永続教員資格が与えられ、老齢年金を得られる教育貢献者でもあった。週の半日は、農業高校の生徒を教えていたが、一週間の大多数の仕事時間は、コミュニティセンターの勤務であった。

フィールドングのコミュニティセンターは、地域の成人学習のための施設の充実として、出発したのであった。建物は2階で、2つのブロックからなっていたが、農業高等学校のテクニカルスクールの建物を改造しての利用である。

さらに、コミュニティセンターとは、別の場所にあった農業高校の古い木工室を利用して、演劇などの芸術活動や木工創作活動をしたのであった。その後に演劇活動などの芸術活動は、コミュニティセンターと隣接したところに劇場ができたので、そこで、自由に活動ができるようになったのである。

多様な活動のために使用する2つの大きな部屋があった。さらに、事務所と図書室の2つの小さな部屋があった。中2階には倉庫が準備され、廊下を簡単に改造して台所とお茶が飲める部屋をつくったのであった。部屋を快適にするために、空気のとおしをよくして、冬はヒーターが十分にきくようになっていた。以上のように様々な条件整備をしての学習者の便宜をはかった。コミュニティセンターは農業高校の所有として形式的に管理されていたのである。

(4) 学校とコミュニティセンターとの違い

サマーセット氏がコミュニティセンターの専属のディレクターとして仕事を始める以前に、農業高校の卒業生を中心として、演劇などのセンター活動の基盤となる地域のグループを校長ワイルド氏はつくっている。

そして、センターができる以前にも地域には、農業高校をとおして、それらの地域組織の接触をはかっていたのである。農業高校を地域のなかで積極的に位置づけていこうという努力がされているなかで、コミュニティセンターが結成されていく。

サマーセット夫妻も1週間のうち、女生徒に子どもの発達、英文学などの授業を半日、農業高校で教える時間をつくり、学校の教師集団との接触をもっていたのである。また、サマーセット氏が農業高校の夜間の授業を担当したことは、成人教育の活動の形態でもあった。

ところで、学校とコミュニティセンターの教育の社会的機能の本質的な違いについて、サマーセット氏は、次のようにのべている。⁽⁸⁾

「農業高校は、若者に関することをしなければならないし、履修課程をもっていなければならない

い。フットボールクラブはフットボールを、クリケットクラブはクリケットを演じる。それらには、規則と慣例がある。あたらしく発達していくための好機は、きわめてわずかなものである。革新的な提案を思い切っでできないのである。

しかし、コミュニティーラーニングセンターは違っている。精神や情操のこころの発達は、コミュニティにむけられている。それは、合理的な発達として開かれている。センターの活動の範囲は、人間の生存ということから広く考えている。

センターは、「コミュニティの生存のための真理を求め、この地上で共に生きていくために、もっともベストな方法を、協同で人々が探求していく場であるのである」と結んでいる⁽⁹⁾。

フィールデング地方にも、様々なボランティア組織があった。農村婦人の組織、若い農民のクラブ、イギリス音楽協会、スポーツクラブ、様々な教会クラブ、ボーイスカウト、ガールガイドなどがあった。コミュニティーセンターができる以前は、それらのクラブは、会員の家庭で行われていて、集まるのには不自由をもっていた。

地域の様々な組織は、いつでも気軽に集まれるコミュニティーラーニングセンターが必要であったのである。また、センターは、街と農村を結びつけるということで、農業高校の敷地とは別に、フィールデングの中心街の鉄道駅近くの場所の農業高校の施設に目づけられたのである。

当初は、料理教室、木工教室、絵画教室、詩の教室などを設けたが、労働者教育の組織の必要性を考えて、そのための講義や議論を実施した。フィールデングの労働者教育教会は、1938年に設立されている。演劇グループも、この年に生まれている。翌年に、音楽の協会、若い農民のグループなどが誕生していくのである。

また、フィールデングのコミュニティーセンターの特徴として、農村地域の成人教育の課題に、子どもの問題に大きな力を注いだことである。1941年に書かれたサマーセット氏の「農村における子どもの栄養」に、当時の子どもの様子や教育実践のことが書かれている。そこでは、近代教育の大きな役割のひとつとして、子どもの栄養状態のよくないことが指摘され、子どもの健康に注意を払うことが成人教育の課題であるとして、次のように強調されているのである。

よい健康は、元気で精力的な活動力になる。現実の農村では、不十分な食べ物、睡眠不足、疲労の蓄積、家庭の経済条件が悪いなかで、子どもは育っている。社会的階層、家庭条件、違った人間的知識の素養によって子どもの成長は異なっていく。学校は、われわれが重要と考えている子どもの問題の多くのことに関係しなければならないことを問題提起している。学校はもはや、小さなコミュニティではないと指摘し、子どもの置かれている社会経済的状況を直視しながら地域の健康教育を展開していく必要性を指摘している。

このように、地域の生活との成人学習のうえで、子どもの健康問題の学習を重視していったのである。コミュニティーラーニングセンターが、地域住民の暮らしを豊かにしていくための学習に、子どもの問題を重視していたことが、子どもの健康のための学習の展開などにもみることができる。以上のように、学校教育のサイドだけでは、子どもの問題は、解決していかないということで、学校

をとおしての親の教育ということだけではなく、独自に地域の成人教育の課題として、子どもの問題を位置づけたのである⁽¹⁰⁾。

第2章 創設当時のコミュニティセンターの学習活動内容

(1) 国際的フォーラムと地域での暮らしの学習—広島原爆問題の学習から—

コミュニティセンターが形成された1938年は国際的に戦争が生まれていたときである。国際的な事件の問題は、民主主義にとって大きな課題であったのである。公開でフォーラムを開き、そのときどきの世界のトピックスのニュースを語った。このフォーラムのねらいは、平和、自由、民主主義を考えることであった。コミュニティセンターにとっても、平和、自由、民主主義を考えていくことは、大きな仕事ということから、サマーセット氏も力をいれていたのである。

例えば、1941年には、ルーマニア、イラン、イラクの油田問題、ドイツのフランス占領、チエコスロバキアの教育、ニューディール政策、ロシアにおける民主主義、ロバートオーエン、クレムリンと民衆などのニューストピックスなどをサマーセット氏の話題提起によってフォーラムがもたれている。

日本とアメリカ合衆国との劇的な戦争についても大きな議論があった。一方でデモクラシーとロシアの間、もう一方でのドイツ、イタリア、日本との突然に起きている世界の生死の闘争などに問題を話しあっている。東南アジアへの日本の侵略、ヨーロッパにおけるユダヤ問題は大きな関心事であった。

そして、1945年には、平和の勝利によって、アフリカやインドの問題、戦後のドイツや太平洋の処理問題など世界を変革していかなければならないことをサマーセット氏は話している。

1947年のサマーセット氏の「コミュニティセンター」について書いた論文によれば、暮らしとの関係で、学習の大切を強調している。そのことについて、次のように語る。技術の発達は自動車やラデオをつくりだしたようにわれわれの生活を豊かにした。しかし、2年前には、原爆によって広島が絶滅したという科学技術の悲劇をつくった。

これは人間の生存と技術の発達を考えていく大変重要な課題である。日本の広島原爆投下問題について、人類の生存の問題として提起している。サマーセット氏は、広島原爆投下は、大量破壊兵器の問題として、ヒューマニズムと科学技術の発達の視点からとらえている。コミュニティセンターで議論した経験をサマーセット氏は次のように指適している。

議論の内容は原爆とはなにか、どのようにして爆発するか、そのエネルギーはどのようなものか、平和的な使用は可能であるのかという原爆の物理的科学的な知識と同時、それ以上に、人々の大きな関心は原爆の社会的効果、人間の生存に対することであったのである。

核の問題は、暮らしと学習の大切さを、一般の人々に新たな段階として提起している。われわれは、未来の核戦争にのろわれているということである。核のエネルギーは、すべての人々に社会的

効果をもっていることに認識するようになるであろう。

生きることと学習するといことを考えるようになることは、一般の人々も考えなければならなくなるという新たな発展が核問題のことから、よくみられることであろうとサマーセット氏はのべている。

そして、コミュニティセンターは、原始エネルギーについて議論していくのである。人類は悲劇的な困難な問題に直面しているのではないか。人間の知性のすばらしいことは、われわれのもっとも基本的な社会的サービスに使用されるべきではないかと強調する。⁽¹¹⁾

ところで、コミュニティセンターという概念は、イギリスなどでみられたコミュニティのサービス活動の場や集会施設ということ以上に、地域の生活のための学習施設として展開していくことの重要性を、当時サマーセット氏は考えたのである。

かれにとって、コミュニティセンターは、地域の生活と結びついた学習施設であったのである。そして、公的にも、コミュニティセンターは、農業高校の地域教育活動との関係でつくられていくことから、教育的側面が大きな比重を占めていた。コミュニティセンターのディレクターに教育の専門家が配置されたのも、地域住民の学習の援助ということが、経営の大きな柱であったためである。

サマーセット氏は、コミュニティセンターについて次のように、自己の実践的経験をふまえて、フィールデングのコミュニティセンターの活動を実践的に総括している。そこでは、地域の生活と学習を基礎として、主に5つの点に配慮していく必要があると強調している。

第1に、地域住民が、日中でも、晩でも、自分たちの問題を援助してもらえる方法を見つけるために、読書したり、映画をみたりできるように、いつでも条件を整えていく必要がある。

第2に、教育を目的とした組織のメンバーに十分に利用できるように親切にもてなす必要がある。

第3に、地域住民が学ぶための方法として、本やドキュメンタリフィルム、映画、展示会などを多くもっていくことが必要である。

第4に、レクレーションのための施設を充実させることである。

第5に、学習のための施策を明確にもっていることである。そして、講座、研究グループ、討論するサークルを整備していくことである。

このサマーセット氏のまとめは、コミュニティーラーニングセンターの実践をとおして、成人教育の学習方法のテーゼである。このように、核問題にみられる平和、民主主義の学習内容の問題提起から学習の条件整備と組織化までをのべている⁽¹²⁾。

(2) 子どものためのプレーセンターと親の学習

サマーセット婦人は、7歳と4歳の男の子の母親であったが、精力的に地域の子どものために活動した。彼女は、フィールデングに子どものためのプレイセンターを1939年に設けたのである。子どもの家がスターする1年間は、自分の子どもの世話も大変であったので、信頼できる家政婦が面

倒をみている。このことにサマーセット婦人は、後の回想録で大変助けられたことを書いている。

サマーセット婦人は、子どものためのプレイセンターをつくることによって、幼い子どもの世話と親の教育をはじめたのである。農村の女性組織に入っている人々は、サマーセット婦人から子育てのことなどを学び、地域の集会を開いていくのである。

サマーセット婦人は、毎週、親のための講座を開いたが、親自身もプレイセンターの運営のための会議を毎月開き、そこで、独自にゲストの講師を招いて学習していくのであった。

子どものためのプレイセンターは、サマーセット婦人の大きなリーダーシップで設立された。ところが、親自身が自主的にプレイセンターを運営していたということに大きな特徴をもっていたのである。

サマーセット婦人は、フォードV8の車を買って、農村の各地域を移動して、子どもの家の大切さや子どもの健康など、子育ての話をしていくのである。サマーセット婦人の学校教育以前の子どものプレイセンターの活動は、農村住民に大きな期待をもたれたのである⁽¹³⁾。

子どものプレイセンターや親の教育活動は、サマーセット婦人を中心にして、コミュニティセンターの大切な活動であった。毎週、火曜日の午後1時半から4時まで、金曜日の9時半から12時と1時半から4時半までプレイセンターを開いた。1944年にプレイセンターに入ってきた子ども77人、年の終わりには112人となっている。街と農村で34のグループが参加しているのである。

親は、20の学習グループで、18のコースの講義を受けている。そして、議論を中心にした講座になっている。具体的なテーマは次に示すとおりである。

子育てとはなにか、遺伝と健康状態、食べ物についての学習、睡眠の習慣についての学習、排泄の機能についてという子育てと出産における健康についての学習がされている。さらに、家族の生活についての学習、死についての学習、遊びのグループについての学習、罪意識について、自分の子どもに嘘をいわない、積極性、神経質な行動について学習している。

また、子どもの気質について、性格とはなにか、修養について、子育てにおける父親の役割、子どもへの暗示、よい母親とはなにかなどが学習されている。以上のように、実に多面的な子育てについての親の学習を展開しているのである。また、毎週月曜日に、保育所を運営する親の会議がもたれ、学校に行く前の子どもの問題に関する議論を熱心にしたのであった。

そして、農業高校では、女生徒が、プレイセンターの援助活動を、学校教育のカリキュラムのひとつとして位置づけたのであった。金曜日に4年フオーム、木曜日に6年フオームの女性生徒が、プレイセンターで実習活動をするのであった。

毎週月曜日の午前中にサマーセット婦人が、プレイセンターで実習する生徒たちに、保育所での実践的な方法について教えたのであった。そして、心理学と女性のための衛生学を身につけさせたのである。

コミュニティセンターによって、親と教師、家庭の役割、若者と親というように、子どもの発達を基礎にして、議論し、相互に結びつけられていく学習が組織されたのであった。つまり、子ども

についての様々なタイプの議論のシリーズがつくられていったのである。

ところで、子どものためのプレイセンターの運営は、親自身で自主的にしていた評議会方式の経験をもっていたが、利用者主体の運営参加、住民参加の方式が、センター全体の管理運営の方式に発展していったのであった。

つまり、センターを利用している街と農村の住民を主体にして、1945年にコミュニティセンターの評議会の形成をみるのであった。その当時のセンター評議会の主な目的は、センターの発展のために管理運営委員会に助言するものであった。

そして、建物に関する目的のリストを作成した。コミュニティセンターのディレクターは、センターの管理経営のために、評議会の意見に対して責任ある約束をとらねばならぬようになっていく。このように、1930年代の後半から40年代の前半にかけて、サマーセット婦人は、ラーニングセンターの施設を中心にして、子どもの問題の学習、住民自治による成人教育実践にとりくんだのである。

(3) 1944年のフィールデングのコミュニティセンターの具体的活動内容

上記であげた以外にも様々な特徴ある学習活動をコミュニティセンターは展開している。1944年のフィールデングのコミュニティセンターの記録として、結成されてから7年後の総合的な報告として、当時の地域教育活動、成人教育活動をサマーセット氏はまとめている。そこでは、センターの活動を次のようにのべている。

コミュニティセンターでは、子どものための学習、演劇、国際的事件のフォーラム、子どもの音楽と芝居、若い人のダンス教室、音楽創作活動、英語の識字教育、現代詩の学習、ドイツ語・フランス語・イタリア語の学習、子どもと大人による科学の勉強会、家族のための教育映画などが学習されていた。若者のグループは、国際的な事件や文化について学んだ。

金曜日は、買い物などの街に集まりやすいという条件で、毎週に、親や子どものための家族むけの映画クラブをつくった。登録者は、子ども64人、成人42人で、20回（1944年）もたれている。プログラムはすべてオープンであり、平均的な参加者は120名を越えていた。

親と子どもがフィルムをみながら一緒に共通のことで考えるという目的で実施した。親は日中に働いているので、夜の7時半にはじまって、30分から1時間ほどのフィルムをみて、その内容について説明を受けたのであった。

フィルムの内容は、国際的な事件、音楽、ゲーム、旅行、科学、産業など多様なものであった。それぞれのフィルムは家族にとっての楽しみになっていた。

フィルムは、テクニカルカラーで、典型的なイングランドの庭園、家庭の安全性、北部アメリカのインディアンの子ども、ビスマルクの勝利、祖母の話しであった。フィルムで話し合いが十分にもたれたのである。この企画は、親子が一緒にみて、みんなで話し合うということで、大変歓迎された。そして、地方の学校、スポーツ団体、女性の組織などに、フィルムの活用を重視したのであ

る。これは、ナショナルフィルム図書からの貸し出しをうけて使用していた。

コミュニティセンターと学校教育との関係では、新たに教育を受ける子どもたちのための協同組織をつくったことである。これは、サマーセット氏によって、1938年10月に提唱されたものである。

そのときの最初の会合では、子どもの教育のための協同組織は、可能な活動内容について議論をした。当面として、学校での新しい芸術教育、市民権のための教育、子どもの研究、詩の談話、子どものための遊び行動などを科学的にアプローチした。そして、小学校後の教育にも議論した。

親のメンバーは、1944年時には、54名になっていた。親と教師の関係についても議論を活発に行っている。家庭と学校、子どもの健康、小学校後の教育内容などについての議論を行っている。子どもの教育のための協同組織は、学校と成人教育を結びつけるものであった。子どもの研究によって、親自身が教育されていくものであった。

ところで、演劇活動はコミュニティセンターの設立によって、サマーセット氏がフィールデングに定着させていったものである。サマーセット氏は地域での演出家と役者を育てていく方式であった。

とくに、地域での若いプロデューサーとして自分自身で演出できるように励ました。フィールデングの街に演劇活動が定着していくには、若い人を育てていく必要があった。

地域での演劇は、自らが演じる活動として、ジュニアと成人の演劇活動があった。ジュニアは登録の会員が20人、成人は64名の構成である。練習などでの会合は、ジュニアが30回、成人が60回と、成人の演劇活動が活発にみられたのである。

ジュニアには農業高校の生徒も入っている。センターの小劇場は、ほとんど毎晩のようにグループを作って、ミュージカルや演劇などの練習に使われたいたのである。その成果を地域住民に披露していくのが楽しみということで、練習に励んだのである。

ところで、音楽活動も演劇活動と同様に、地域の芸術文化活動として、地域住民の大きな楽しみのひとつであった。コミュニティセンターが作られた当時の音楽のグループは、創作のグループが19人の登録で、年間30回の会合、成人の合唱グループが、34人の登録で、年間20回の会合をもっている。

創作音楽では、学校の教師が指導して、竹の管弦楽の音楽を年間とおして実施している。また、他の楽器を演奏することをかれらは希望していた。また、他の指導者のもとにグループで合唱をしている。

フィールデングには、コミュニティセンターが設立される以前から、住民自身によって音楽愛好会が1932年にすでにつくられていた。この協会はイギリス音楽の愛好によって運営されていた。街にあるピカデリー喫茶に集まり、音楽を聞いたり、専門家の話を聞いたりしていた。

音楽演奏のプログラムは、近くのパーマストンノース市の芸術家によって、与えられたのである。その種目は、声楽のトリオ、ソロ、ピアノ、チェロ、バイオリンなどが含まれていた。

この催しものは、フィールデングの音楽愛好家による実行委員会で開催されていたのである。会

合はメンバーの自宅でもたれたのである。しかし、1939年4月より、毎月にコミュニティセンターで行われるようになった。毎月の木曜日にコンサートが催されるようになったのである。

つまり、それぞれの音楽コンサートのプログラムが公式な行事として、センターの事務局によって準備させるようになったのである。1948年には、住民のセンター運営評議会として、年間の音楽コンサートの企画が責任をもって実施されるようになっていく。コミュニティセンターによって整備された音楽協会は、演奏者と音楽聴衆者のための機会を準備することになり、クラシック音楽を楽しんだり、若い音楽家を励ますことになった。

毎月の音楽コンサートのプログラムには若い音楽家の演奏が必ず含まれていた。そして、音楽を学ぶ生徒にも、聴衆の前で演奏する機会を年間のプログラムのなかに入れたのである。

このように、音楽を単に楽しむばかりでなく、音楽鑑賞をするなかで、若い人が努力する機会を与え、地域住民の音楽愛好家が彼らを育てていくという地域の音楽教育方式をとっていたのである。

フィールデングの女性の合唱グループも女性リーダーによって、1932年に生まれている。このグループは、定期的に練習している。このグループは、プログラムを毎月実行し、他の地方のコンサートやフェスティバルに参加してきたという地域での影響力をもっていた。地域の合唱グループもコミュニティセンターができたことによって、練習施設の確保、リーダーとの連絡、演奏の企画など容易にできるようになった。

コミュニティセンターの活動として、学校を終えた若い青年に星をみるグループがあった。自分達で3インチの望遠鏡を設置して星の観察をしながら語らいをするものであった。登録人員は、16人で、コミュニティセンターでの会合は、20回となっている。

コミュニティセンターの英語の書き取りのクラスは、5人で年間24回やっている。文字の書けない人に対する教育を丁寧に行っているものであった。短い物語や雑誌を読んだりして文字を学ぶことの楽しみを取得している。このチューターにディレクターのサマーセット自身があたっているのである。

英語の詩の教室は、21人の登録で年間20回の会合がされている。1920年頃からのイギリスやアメリカの現代詩人の作品を読みながら勉強していくものである。外国語の勉強は、ドイツ語、フランス語、イタリア語などがセンターの小さなグループで学習されている。

コミュニティセンターでは若い人々の4C（コミュニティセンターの文化クラブ）クラブをつくった。このクラブはコアとしてディスカッションサークルをおき、卓球、スケート、趣味、カードゲームなどをやった。

コミュニティセンターにとって、若者の活動の空間と騒音は困難な問題であった。多くの若者たちがやりたいことは、逆に、年輩者が参加する大切な活動を不安にさせていく。そして、センターの建物を若者たちのクラブが自由に使用することはできない状況である。このために、若者が自由にのびのびと自分のやりたいことをするためには、特別の配慮が必要であった。4Cのクラブは、そのためのものであった。若者のクラブのメンバーは男女あわせて20名である⁽¹⁴⁾。

若者の活動は、コミュニティセンターのなかでも特別重視してとりくんでいる。また、サマーセット婦人によって、とりくまれた結婚と家庭生活の学びも人気のあったものである。身体の教育、演劇活動のグループ、合唱、音楽鑑賞、ダンス、多様なゲームなどが積極的にコミュニティセンターの行事としてとりくまれたのである⁽¹⁵⁾。

以上、みてきたように、1930年代の後半から40年代の前半に、フィールデングのコミュニティラーニングセンターは、農村地域住民の学習機会の保障ということを中心にしながらも街の住民も含めて、学習活動が発展していったのである。

地域生活ということは、地域の社会的サービスという面ばかりでなく、文化的権利、スポーツ・レクリエーション、平和の問題をも含めて、人間にとって、様々な生存の権利の側面を意味しているのであった。

第3章 コミュニティラーニングセンターの継承・発展

(1) 戦後のコミュニティラーニングセンターの管理運営の危機と継承

コミュニティセンターのディレクターは、1948年から1957年まで、2代目のケン氏につながっていくのである。サマーセット氏は、ビクトリア大学のスタッフとしてむかえられる前の2ヶ月間、ケン夫妻とともに引き継ぎの仕事をしている。

ケン氏は妻のアラマ婦人と3人の娘をつれて、フィールデングに赴任してきている。ケン氏は、ディレクターとして、フィールデングコミュニティセンターの地域教育活動を継承していく。すでに、ケン氏がコミュニティセンターを継承したとき、施設は老朽化しており、また、地域の学習活動も発展して、コミュニティセンターの建てかけの問題が議論されているときであった。

建物は内部も外部もペンキを塗装しなければならないし、事務所の空間の不十分さ、トイレットや台所の不足問題などがあった。2つの建物は荒廃しており、利用していないスペースもあった。

この状況はあらためなければならないが、負債をすることなしに改善していかねばならないということから、教育省とも交渉したが、うまくいかなかった。

そこで、建物の資金のために、すべての地域のクラブから会費を集めることにした。そして、就学前の子どものためのプレイセンターを、コミュニティセンターと施設的に一緒にすることで資金を集めようとしたのである。

就学前の子どものプレイセンターを利用する地域を東と西に2分して、それぞれ2日ずつとした。そして、農村の子どもは金曜日一日ということで、月曜日から金曜日まで子どもを預かり、学習に参加させたのである。

教育省は、プレイセンターに必要なアシスタントを、パートタイムの形態で働くことを認めなかったのである。ケイ氏の妻は、2人の就学前の子どもがいたため、フルタイムは無理であった。そこで、ケイ氏の妻の代わりに、イスターブローク・スミス女史をアシスタントディレクターとして、

センター評議会が雇ったのである。しかし、ケント氏の妻は、プレイセンターの仕事の中心的な担い手になることはかわらなかった。

1945年にコミュニティセンターの住民の学習者による評議会が生まれたとき、コミュニティセンターの建物の立て替えは、大きな課題になっていたのであった。コミュニティセンターの財政は、教育省から農業高校をとおしてくまれていた。コミュニティセンターは、農業高校の予算に大きく依存していた。コミュニティセンターのスタッフも教育省とリンクした予算であったのである。

センターの建物の立て替えは、大きな事業であった。立て替え期間の半年間は、最初のときは全戸の世帯にリーフレットを配って理解を求め、その後は、毎月、それぞれのクラブの会員と、500名に新聞を配布した。この間も、コミュニティセンターで活動していた様々な活動グループは継続されていたのである。

ところで、1950年にスミス女史が辞任して、ケント氏の妻のアレン女史がアシスタントディレクターになった。1952年にコミュニティセンターに隣接して、フィールディング小劇場も完成し、演劇グループの活動や観賞に施設が充実していったのである。

1953年の1年間に14,000人の住民が小劇場を利用しているのであった。これらの施設の充実において、コミュニティセンターの19名からなる住民による評議会が、大きな役割を果たしたのであった。

評議会のメンバーを中心にして、地域住民のコミュニティセンターの活動の支えが、立て替えや小劇場の建設という、困難な事業を成功させたのである。また、ビクトリア大学のスタッフになった、前ディレクターのサマーセット氏から、絶えざるアドバイスがあったことをケント氏はのべている。

1960年代のパウル夫妻活動の時期に、コミュニティセンターの運営にとって大きな危機が生まれた。1964年に、教育省の地方局長からコミュニティセンターを運営するためのディレクターの給料や、建物の維持管理費の打ち切りの政策がだされたのである。経済は厳しいし、大学も専門学校も拡張しなければならない状況という教育省の打ち切りの理由であった。

コミュニティセンターの管理運営費やディレクターの給料は、教育省として、援助する必要がないという通告で、コミュニティ評議会は、何度も交渉をくりかえしたが、教育省の地方局長の経費の打ち切りの態度は変わらなかったのである。

1964年7月にセンター評議会と教育省との話し合いがもたれたが、教育省からの提案は、次の3点から1つの選択を住民に求めた。

- 1、センターは地域社会の団体に合併させる。自分たち自身で管理運営やスタッフの支払いと責任をもっていく。
- 2、地方行政区がセンターの建物を引き継いで、かれらが管理して、センターを利用するものに貸す。
- 3、農業高校は建物は維持するが、しかし、センター自身で料金を取り、スタッフは、自分たち

で雇うという自己管理方式を採用するかどうか。

以上の三点のなかから1つの選択を迫られたのである。厳しい交渉のなかで、センターの建物管理は地域住民にということで、農業高校からの所有から分かれて地域住民の所有になったのである。このことは、施設の維持管理は地域住民の負担ということになっていく。さらに、教育省から、成人学習の予算は講座時間数によって決められていくという方式になる。

コミュニティセンターの建物の所有権は、1960年代の後半に、農業高校の建物から地方評議会のものに変わった。交渉は、移譲される2、3年前から行われていたのである。多くの地域のグループ組織は、コミュニティセンターの建物の部屋を借りていたのである。

フィールドイング地域の学習活動の多くは、農業高校で実施していた形態をとっていたのである。駅舎は、芸術活動のセンターであった。焼きもののように、特別の備品が必要な学習グループは、コミュニティセンターに部屋の料金を支払っていた。

コミュニティセンターの専任職員の賃金は、教育省から配分される講師料のなかから支払っている。コミュニティのラーニングセンターのアドバイザー委員会は、地域の住民代表と成人講座の講師代表から構成されていた。

1970年にコミュニティのために準備されていた農業高校は、7年生と8年生の学年を設けた。農業高校の学習内容が高度化されることによって、コミュニティラーニングセンターは、学校から離れていく歴史的な背景があったのである。コミュニティラーニングセンターのプログラムは、パートタイムのスタッフで運営されていた。

ニュージーランドでは、多くの学校が、地域の教育のために時間をさかねばならなくなっている。学校から独立して独自にコミュニティラーニングセンターの運営をしているのは、他にもあるが、ニュージーランドでは、学校教育の仕事として、地域成人教育が発展していったのである。この意味では、フィールドイングのコミュニティラーニングセンターは、学校教育組織から分離していくという展開をもっていったのである。

農村においては、地域教育活動は大変困難であったのである。農村の人々の地域教育活動の努力は、自己防衛で、生きていくうえで大切なことであった。多くの農村女性はコミュニティラーニングセンターの活動をとおして、ただ働くだけでなく、街に来て、楽しみをもつことができるようになった。つまり、街の文化にふれることによって、農村の地域も多くの変化をもたらしたのである⁽¹⁶⁾。

(2) 1990年代のコミュニティラーニングセンター

フィールドイングのコミュニティラーニングセンターは、1999年時において、2人の専門職員によって、地域の文化・学習活動の企画運営、地域組織のコーディネーター、講座の事務などを行っている。

建物は、1948年の戦後まもない時期に改造した施設を現在も利用しているので、老朽化が進んでいる。50年間に、施設の拡充と充実は行われていない。また、街の図書館、アートセンター、体育

館も別のゾーンに地方行政の役所によって、立派なものが建てられており、コミュニティラーニングセンターが、唯一の地域の学習・文化・レクリエーションの施設であった時代からみると、施設の分散化がみられる。

コミュニティラーニングセンターの講座も、ラーニングセンター以外に、農業高校、アートセンター、それぞれのグループごとが行うコミュニティホームなどの施設などになっている。

ところで、1999年度のコミュニティのラーニングセンターの講師料2000時間は、教育省から予算配分されている。また、全体の講座講師料の15パーセントは、コミュニティグループに予算が割り当てられている。その予算は、様々なボランティアグループの養成に使われているのである。

コミュニティセンターが、実施する1999年の2月から6月の講座案内は次のようになっている。金融講座が、毎週の月曜日の7時から9時まで、受講料月71ドル（1ドル約65円99年3月段階）、コンピューターの基礎、月曜日から金曜日の6時半から8時、2月と4月、受講料月53ドルである。

コンピューターの入門が10講座で、毎週で1時間半。ウインドウズの利用など20講座となっている。それぞれの受講料金は月で50ドルから70ドル前後になっているが、コンピューター関係は大変人気のある学習講座になっている。

コミュニケーションの講座は、12教室あるが、マオリ語、旅のイタリア語、手話、英語の作文などとなっている。健康のための講座は、ヨガ4室、マッサージ法、アロマセラピーなどの7教室である。

料理教室は、5教室、ハーブは、2教室となっている。アウトドアの講座としては、庭園の手入れ、フィッシング、ボート・ヨット、VHFラジオの資格となっている。

アート教室は、フラワーアート、インテリアデザイン、写真、絵画、手芸、木工、焼き物陶芸などとなっている。アート教室は、全部で31講座と最も多くなっている。

健康教室やアート教室の受講料金は、すべて有料で、20ドルから80ドルの幅で講座の時間数に応じて徴収しているのである。

就学前の子どものための講座は、2つの教室があるが、陶芸教室とダンス教室である。これらの講座の内容をみるかぎり、コンピューターやコミュニケーションなどの講座を除いては、文化・レクリエーション的な教室が多数を占めている。地域の民主主義や地域ボランティアの養成、地域の子どものためのコミュニティラーニングセンターの学習の役割も1989年の教育改革法によって、趣味やお稽古ごと中心に大きく変遷してきていることがわかる。

講座開設によって、経済的収益が困難な社会問題、国際的事件、福祉問題などの地域民主主義のための市民教養の学習が後退し、代わって、講座料収入による一定の利益を確保するために、趣味やお稽古という文化的な講座になっていったのである。

ま と め

1938年に、ニュージーランドのフィールデングのコミュニティラーニングセンターは、イギリス

のケンブリッジのビレッジカレッジ、デンマークの国民高等学校、アメリカのウイスコンシンのコミュニティエデケーションなどの地域成人教育の実践の経験を吸収しながら、ニュージーランドの独自性をもちながら結成された。このフィールデングのコミュニティラーニングセンターは、ニュージーランドの各地の地域成人教育センターづくりに大きな影響を与えていくのである。当時の教育省のモデル地域として、フィールデングのコミュニティラーニングセンター調査もきめ細かく行われ、その普及のための典型とされていたのである。ニュージーランドの成人教育の歴史にとって、フィールデングのコミュニティラーニングセンターは、大きな位置を占めたのである。

フィールデングのコミュニティラーニングセンターは、農業高校の地域教育の一環として成人教育の位置づけがあったが、センターの実際の経営は、独自に農業高校とは別に、行なったことが特徴である。農業高校の校長のワイルド氏の提案によって、コミュニティラーニングセンターが生まれたが、学校経営の延長としてではなく、独立した専門スタッフのサマーセット夫妻が配属されたのである。身分的には、農業高校の非常勤講師として位置づけられて、給料などの保障は学校教育制度と深くかかわっていた。

サマーセット氏は、当時にクライストチャーチの郊外のオックスフォードで労働者教育協会のサマースクールなどの実践で知られていた成人教育の実践家であった。フィールデングの農業高校の校長ワイルド氏とともに、カーネギ財団の援助で世界の教育視察を一年間している人物である。

コミュニティラーニングセンターの経営理念や実際の管理運営は独自性をもって展開したことは、イギリス、アメリカ、デンマークなどの経験を学んでいるが、ニュージーランドの特徴をもっているのがあった。

センターの創設提言者のワイルド氏は、イギリスのビレッジカレッジの方式では、コミュニティラーニングセンターの管理運営はできないことを強調していたのである。伝統的にコミュニティが成立しており、農村でのビレッジホールがあたりまえのように存在しているイギリスと、それらを組織化していかなければ、地域生活が生まれてこないというニュージーランドの特殊性と大きな違いがあったのである。

学校とは別に、独自に地域の成人教育施設をつくったことは、日本の公民館に類似しているが、日本と決定的に異なるのは、教育サイドの論理から生まれていることであり、内務省的な地域住民を管理統制、住民動員していくという論理がないことである。日本においては、住民の学習権のサイドの論理と、この住民参加動員の論理が常に対抗をもって、地域の公民館がある。日本における戦前の地域の公民教育は、伝統的な地域の町内会・部落会の基盤との関係が強いところが多く、多くの農村地域では、その継承のうえに、地域の公民館が形成されたことによって、学校教育と一定の距離をもっているという歴史性とは異なるのである。

また、学校との関係で、日本と異なるのは、学校教育との連携がコミュニティラーニングセンターの経営のなかで当然のように日常化されていることであり、住民の生活や文化要求を大切にしながら、住民の学習、文化要求が直接に反映される住民評議会方式でセンターが日常的に管理運営

されていることである。センターの管理運営において、住民の参加民主主義が日常化されていることが大きな特徴である。

ラーニングセンターの経営の独自性をもちながらも、学校教育との連携は強く意識されたセンターの経営であった。農業高校の生徒たちをセンターでの子どものプレイセンターの実習をさせるのも、その例である。連携事業は、学校教育の延長ではなく、学校教育が地域の実際生活のなかから学んでいくということで、地域のなかに生徒たちをださせて、実際に体験しながら学ぶという方式であったのである。また、学校経営においても、生徒たちの自治を最大限尊重して、地域の民主主義形成のための教育を実践していたのである。

この独自性をもたせた背景には、世界大恐慌という歴史的な経済的困窮のなかで、地域で生活している人々を主人公に、成人独自の学習内容を強調し、平和、民主主義、地域の生活権を大切にしたいためであった。政治的にも労働党政権がニュージーランドで成立して、大きな社会的、経済的な変革が求められている時期であった。

以上のように、日本の公民館の形成との比較検討において、ニュージーランドのコミュニティーラーニングセンターの形成での理念と実践は、日本における地域民主主義形成との関係で公民館を考えていく、貴重な教訓である。

注

- (1) Barry M. Williams, Structures and Attitudes in New Zealand Adult Education, 1945-75, New Zealand Council for Education Research, 1978, p.154-155
- (2) A. B. THOMPSON, ADULT EDUCATION IN NEW ZEALAND, New Zealand Council for Education Research, 1945, p.320-353
- (3) A. E. CAMPBELL (1945), THE FEILDIG Community Center, New Zealand Council for Education Research, p.1-6
- (4) J. C. Dakin, The Community Centre Story, National Council of Adult Education, 1979, p.10-11
- (5) Gwendolen L. Somerset, Two Experiments in Community Center
- (6) L. J. Wild: an experiment in self-government, New Zealand Council for Educational Research Community Education, Wellington National Council of Adult Education, 1972, p.19
- (7) Report of a Consultative Committee: Further Education for Adults: Council of Adult Education, New Zealand 1947, 82-85
- (8) J. C. Dakin, The Community Centre Story, National Council of Adult Education, 1979, p.16-18
- (9) H. C. D. Somerset: The Community Centre. Simpson & Williams Christchurch, N. Z, 21
- (10) H. C. D. Somerset: Child Nutrition in a Rural Community: New Zealand Council for Educational Research. 1941
- (11) H. C. D. Somerset: the Community Centre. Simpson & Williams Christchurch, N. Z, 14-15

- (12) H. C. D. Somerset : the Community Centre. Simpson & Willianms Christchurch, N. Z
- (13) Gwendolen L. Somerset, Sunshine and Shadow, new Zealand Playcentre Federation Auckland, 1988
- (14) B. L. Evans, Golden Junilee Feilding Community Centre 1938-1988, *the Feilding Communty Centre Golden Jubilee Committee*, 1988, p.13-62
- (15) J. C. Dakin, the Community Centre Story, National Council of Adult Education, 1979, p.19-23
- (16) 前掲書、p.63-160参照